

加藤弘光・日本人の精神、東洋と西洋の間で

山田 哲

(スペインアート評論家協会員・国際アート評論家協会員)

サラマンカ、2019年2月8日

「桜の樹の下には屍体が埋まっている。」

衝撃的出だしから始まるこの小説は梶井基次郎(1901~1932)の『櫻の樹の下に』の冒頭である。主人公は桜の花の美しさに囚われた。そして美の裏側に「醜」の存在を感じた。主人公はあまりの桜の美しさに不安にかられ、

「桜の根は動物や人間の屍体から水晶のように垂れてくる液を貪欲な蛸のように吸い取っている。」

と想像するのだが、それは31歳結核で早逝した梶井基次郎自身の想像であったとしても全く不思議ではないだろう。古来桜はそのあまりの美しさ、そしてその美しさが儂く散っていく姿は、日本人は時として激しく、ときとして退廃的なインスピレーションの源となってきた。いまここにまた桜からインスピレーションを得ている画家がいる。加藤弘光。

アートをやりたいとは思いつつ、将来の道に迷っている時に偶然訪れた日本画展覧会に入り、その作品に感銘を受けてこの道に決めた。美大に入った後は西洋画も勉強したが、もともと持っている才能が日本画に向いていたのであろう。日本画の画材はスペインのリアリズムの重鎮アントニオ・ロペスのような重厚な作品には向いていない。そこで日本画の古典の作品から学ぼうとしたが、学生時代当時まだ知られていなかった写実と想像を融合させた「奇想の画家」伊藤若冲(1706~1800)に注目し、先生方から変わり者扱いされたが、現在若冲が天才として受け入れられていることから加藤の目の鋭さがわかる。そして若冲到学んだ大胆さが、美大で学んだ西洋画のエッセンスもおそらく無意識のうちに取り入れながら、彼独自のテイストとなって作品の中に現れる。一定の様式化が要求される日本画の伝統ばかりでは

「自分自身が全く表現できなくなりますから。」

彼は桜の花をこの展覧会の作品のモチーフにした。櫻は彼のふるさと宮城の風景、日本人にはその美しさと儂さで日本の美学に深く根づいている風景でもある。それは加藤の根源であり、日本人の根源でもあるのだ。

彼は一本の樹の全体像を扱わず、大胆に桜の花だけを扱った。日本には神教という多神教の文化があり、花びら一つにも神秘を見いだすことができる。加藤曰く、だからこそこういう描き方もありだという。概ね舞台は夜。バックは黒になる。加藤のこの黒は美しい。決して闇の黒ではない。黒の中にうっすらと金や銀が直観にしたがい配置され、それが見事な効果となって櫻の花びら一枚一枚ひき立てる。ライトの位置や陽の光で背景に描かれている月の見え方もかえてしまう。そんな黒のマジックは消えゆく運命にある桜が美の中に命を燃やす最高の舞台を提供する。

一見すると通常の日本画に見えるかもしれないが、さりげなく入れ込んだ加藤の工夫は間違いなく加藤スタイルを作り出している。

美しさと死。直観的に美に「死」をみるからこそ櫻の「生」の美しさに日本人は惹かれるのだ。紅葉や藤の花なども扱ったが基本的には同じことが言える。死にゆくものが見せる人生最高の瞬間。スペインで何をやりたいか聞いてみた。

「自分の世界をしっかりと提示してみたいですね。僕が理解してもらえるのかどうか、じっくりみてみたい。」

東洋から西洋に来て西洋文化に媚びるつもりはない。みている人がどう感じるかは自由。西洋人がどう解釈するのか、日本人のように桜に死を見るのか、自然の美の中に何を見るのか、私も楽しみにしているのである。